夢の帰属

アントニオ・タブッキ著／和田忠彦訳
『夢のなかの夢』
岩波書店　二〇一三年九月

声の作家タブッキが夢に耳をそばだてる。夢の持ち主が特定の時代・場所・空間で何を夢に見ていたかを夢想し、自分の夢であり他人の夢である二十の世界をつなぎ、「愛する芸術家」たちの夢の語り部となることで、各芸術家の創造の源泉や運命の前奏を描き出してみせている。

夢は感覚の堆積を材料に、感覚の塊である人間が脳で、無意識下で再構成する世界である。脳には経験や思い出が状態として蓄積されている。その蓄積から生まれる夢の世界は、記憶という行為による表出とは異なり、捏造されていない記憶のようなものだといえるだろう。

それら二十の夢をタブッキは愛情をこめて騙る。熟練した鍵師のように、錠前の微かで確かな音を聞き取り他人の夢に踏み込む。扉もいつでも現れるわけではないだろう。夢は入り口のない個室のようなものかもしれない。絶妙なタイミングで壁のどこかのまさにその場所に触れたら指先に鍵穴がみえるような幸運な偶然のひとつを、感度のよいソナーのような声の作家は見逃さない。

タブッキが魅せる二十の夢は、それぞれの夢がその持ち主の創作の源泉であり運命を囁く。迷宮からの飛翔を描いたダイダロスの夢から始まり患者を体験するフロイトの夢で閉じられる『夢のなかの夢』は、ひとつの大きな夢と捉えることができる魅力的な構造を持つ作品である。ダイダロスの夢から始まると述べたが、この小さいながらも壮大な夢の本は表紙からすでに夢を始めている。表紙で私たちを迎え入れるのは三人の女性である。シャヴァンヌの作品「夢」（一八八三年）を部分的に使用したもので、それぞれ愛を表す薔薇、栄光を表す月桂樹、財を表すコインを持っている。彼女たちはどこかに向かっている。どこだろうかとページを繰ると、ダイダロスの夢が幕をあける。

ダイダロスの夢は夢の原型である。ミノタウロスを閉じ込めるための迷宮をつくった建築家であり、太陽のもと息子のイカロスと翼で飛んだ悲劇の飛行家だが、タブッキのダイダロスは少々異なり、夜の建築家であり翼を与えるものである。彼は入り組んだシナプスの様に夜に張り巡らされた迷宮を慎重かつ確実にたどる。彼だけが「ここから抜け出る術を知っている。」迷宮の奥で、彼は月に恋焦がれてすすり泣くミノタウロスに出会う。「ぼくには手がとどかない。この宮殿に囚われの身なのですから。草原にでもからだを投げ出して、夜中、かの女の光で口づけされるだけで満足だというのに」。夜の翼は悲劇を起こさない。ダイダロスは自らのために用意した翼を与えて脱出を手助けし、ミノタウロスの迷宮からの飛翔を見守る。建築家の姿は穏やかである。昼の空に飛んだ息子を失うダイダロスは自らが迷宮にとどまることを選び、人間の業を司る夜の女神ニュクスに囚われ続けた牛頭人身の怪物を救い出し夜の空に放つ。どこまでも飛翔するミノタウロスの姿は夢の国の門から人間の世界をめざすオネイロスさながらである。ダイダロスの夢をはじめ、夢想される二十の夢にはニュクスの子孫

が立ち会っており、オネイロスはもちろん、モロス、ケール、タナトス、ヒュプノス、モーモス、オイジュス等が二十人の夢のまわりを漂っている。

フロイトの夢のあとに設けられた「この書物のなかで夢みる人びと」という章では、タブッキが愛する芸術家たちの生涯を簡潔に紹介しており、そこで読者は夢の持ち主の夢の外での姿を提示され、夢のなかの夢から目覚めさせられる。それまで追ってきた夢の持ち主の紹介は夢の一部を成している。史実のように思えるものも、実際は複数の誰かの記憶と記録の集積であり、その厳密な真偽は不明で、各生涯の紹介は私たちの「夢のなかの夢」から「夢」への着地を助ける仕組みとして作用する。

表紙の三人の女性が向かっている先にいるのは、一人の旅人である。シャヴァンヌの「夢」には、ミノタウロスが望んだように夜に月の光に照らされて眠り込んでいる男性が描かれている。しかし本書では彼の姿は隠され、夢をみる人物は描かれない。夢を夢だと意識していると思い込むこと、夢の持ち主が夢見る自己を認識することは、自画像を描く自己を描ききることと同様に不可能だからではないだろうか。そもそもの夢の起源は、オネイロスがいずれかの門をくぐることで生まれていたとされていたのだから、夢の帰属は夢にある。辿れば合わせ鏡のように永遠に続くかもしれない夢のこだまを、本書は時空を縫い合わせて描き出してくれている。

本書は一九九四年に青土社より刊行され、一九九七年に同社より新装版が出版された『夢のなかの夢』（和田忠彦訳）を文庫化したものである。

（石井沙和）